

難民がつくった国「邪馬台国」その3－弥生時代の区分－

「弥生時代概念の変化」

弥生時代には、朝鮮半島や中国大陸の戦乱を逃れてきた人々が日本列島に定住するようになり、それまでの縄文人たちの文化とは違う文化を持ち込んで、新たな文化を築いていった時代と考えられます。では、弥生時代は「いつ始まって、いつごろまで続いたと考えられるのか」について検証してみます。というのも、実は、現在の考古学界でも、弥生時代の始まりと終わりについては、いくつもの見解があり、統一的な見解が確立されてはいないのが現状だからです。

弥生時代は「前期」「中期」「後期」に区分されるのが普通です。しかし、これらの各期が、実年代の何年ごろに当たるのかについては議論があり、学会でも確定しているとは言えないのです。もともと弥生時代という時代は、それ以前の縄文時代が「縄文式土器という土器が使われた時代」という定義だったので、「弥生式土器が使われた時代」という定義から出発したものです。その後、弥生式土器が使われ始めた時代に水稲耕作も始まったと考えられ、「弥生時代は土器とともに水稲耕作が始まった時代」として定義されることになりました。そして1980年ごろまで、弥生時代が始まるのは紀元前3世紀ごろだとされてきました。

しかし、1978年、福岡市の板付遺跡から、夜臼式土器やうすという縄文時代晩期のものとされる土器と水稲耕作遺構が同時に発見され、さらに1981年には佐賀県唐津市の菜畑遺跡なばたけから、山ノ寺式やまのてらといわれる夜臼式よりさらに古い縄文土器と、水稲耕作遺構が同時に発見されるという事件が起きました。この発見により日本列島の水稲耕作は縄文時代の晩期には始まっていたということが否定できなくなったのです。

しかし、その後、水稲耕作の開始こそ弥生時代の始まりだとする議論が起こり、山ノ寺式土器、夜臼式土器の時代を縄文晩期ではなく、弥生早期とすべきだとの意見が

盛んになりました。そして、弥生時代の開始時期は紀元前 4～5 世紀とする見解が一般的になりました。

しかし、議論はこれで終わりませんでした。2003 年、国立歴史民俗博物館（歴博）のグループが、炭素 C14 の分析から北九州の水稻耕作は紀元前 10 世紀に遡る可能性があるという研究結果を発表しました。この発表によれば弥生時代の始まりが一気に 5～600 年近く遡ることになります。しかし、この研究発表には学会内部からも異論が多く出され、いまだに統一見解は確定していません。

「C14 による年代特定」

C14 とは炭素の同位体のことです。炭素は原子核に 6 個の陽子と 6 個の中性子がある C12 が普通の炭素ですが、中性子が 8 個ある C14 という放射性同位体があります。C14 という炭素の同位体は空気中に一定の割合（炭素全体の約 1 兆分の 1）で存在するのです。そして炭素は動植物などに吸収されて細胞の中に留まります。そこで、細胞の中の C14 の割合も空気中の割合とほぼ同じになるわけです。動植物が死ぬと新たに C14 は吸収されず、蓄積されていた C14 は自然に崩壊して窒素に変わります。そして、時間が経つと物質の中の C14 の比率は下がっていきます。その比率が下がっていく速度が一定しているので、発掘された遺物に含まれる炭化した動植物などの C14 の残量を調べれば、その動植物などが死んでから経過した期間が逆算できるのです。このように C14 測定による遺物の年代推定は、科学的で実証性がある方法ですので、土器の形式による年代推定などに比べると、客観的な年代が求められる年代特定法だといえることができます。実際、遺物に含まれる C14 により遺物の年代を特定するという方法は、広く世界で実施されているようです。

しかし、C14 による年代特定にはいくつか問題点があります。一つは空気中の C14 の存在する割合が一定だとする仮定が前提なのですが、実際には完全に一定ではないのです。過去のある時代の太陽活動の活発、不活発などにより空気中の C14 の割合は変わってきました。鷲崎弘朋氏によれば過去 3000 年間で 4% 変動しているのだそう

で、4%の変動は年代を特定するとき 320 年の差ができるのだそうです。(鷲崎 2010)

特に、邪馬台国があったとされる 3 世紀は空気中の C14 の割合が不安定だったために、現在の C14 の残量を調べても、その数値から逆算して特定できるはずの時期は一つに定まらないのです。つまり、ある遺物に付着した C14 が 3 世紀の時代を指している、それは 3 世紀の複数の時点を指し示すという現象が起きるのです。また、空気中の C14 は内陸部と海岸付近では微妙に割合が違います。従って、遺物が発掘された場所によって C14 が指し示す年代が異なることとなります。さらに遺物の種類により C14 のデータが高く出たり低く出たりする誤差もあります。果実の種やクルミなどの測定値と土器の付着物の測定値では、炭素年代は土器の付着物の方が古く出る傾向があるようです。実際にはこういった C14 の割合の数値は補正して用いられるのですが、その補正作業には、ある程度調査を担当した研究者個人の見方が入らざるを得ません。そこで、同じ調査結果でも、その C14 の数値が何年を指すのかについては、研究者間に意見の相違が生じるのが現状です。安本美典氏によれば、歴博のデータも読み方を変えれば、弥生時代の始まりが歴博グループの言う紀元前 10 世紀ではなく、紀元前 4 世紀ごろという答えも出せるといいます (安本 2012)。これでは C14 の年代を使って 10 年単位の時代差の議論などできるはずもありません。また、日本では C14 による年代特定の実績がまだ少ないということもあって、現段階では C14 から年代特定は議論を呼ぶ段階にあるということです。特に、紀元 3 世紀の絶対年代の特定は極めて困難といわざるを得ないのです。

しかし、C14 による考古遺物の年代特定はこれからさらに普及し、3 世紀の不安定な時期についても、精度高く時期を特定できる日は来ると考えられます。今まで各研究機関が蓄積してきた考古遺物が、C14 によって時代が定められる時が遠からずやってくるでしょう。その時、従来の方法では明らかにできなかった新たな知見を我々は手にすることになる可能性は大きいと思われれます。歴史の研究は新しい時代に入ったのだと言えます。

「年輪による年代特定」

もう一つ、遺物の年代を特定する新たな方法があります。年輪年代特定法です。木の年輪は1年に一つ増えます。そして、その年が温暖だとその年にできた年輪が厚くなり、寒いと薄くなります。毎年の気温は同じではないので木の年輪は毎年厚くなったり薄くなったりして蓄積されます。そして何年にできた年輪は厚く、何年にできた年輪は薄いという年輪の「厚い、薄い」のパターンを古代までずっと調べて、ある種の尺度を作った研究者がいるのです。奈良国立文化財研究所（奈文研）の^{みつたにたくみ}光谷拓実氏です。光谷氏は永年の研究によりいろいろな種類の木の年輪のパターンを古代までつなぐ尺度を完成しました。偉大な業績です。この尺度ができたことで、遺跡から出土した木の年輪を調べれば、その年輪が何年に育った年輪かが分かり、その木がいつごろ伐られたのかも分かるというものです。もちろん、伐採年を正確に知るためには木の一番外側の表皮の部分についている年輪があることが必要です。しかし、実際に発掘される木片は、表皮が削られているものがほとんどですから、発見された木片から削られた部分の年輪の数を推定し、伐採年を割り出すという作業をします。この方法も科学的で追跡可能な方法ですので、遺跡や遺物の絶対年代特定には有効な方法です。

しかし、この方法にも問題があります。それは、資料となる木材がその遺跡で用いられたのは、その木が伐採されてから何年後なのかということが特定できないことです。弥生時代には木を切る道具は斧しかありませんでした。鉄斧も一部では使われていましたが、大半は青銅の斧、あるいは石斧が使われていた時代です。ですから木を切り倒すのは並大抵の作業ではなかったと考えられます。場合によっては何年もかかったかもしれません。また、切り倒すのは大変でしたから、自然に倒れた木を活用したケースも多々あると考えなければなりません。さらに、切り倒してから柱や板などに加工するにも、斧や^{やりがんな}槍 鉋などで時間をかけて加工していたと思われるので、必要な木材を作るまでにも、さらに多くの時間が必要だったでしょう。もう一つ、そのように木材は切り倒すにも、加工するにも、大変な時間と労力を必要としたので、現

在と比べると木材は大変貴重な物でした。ですから、とにかく、使える限り使いまわして利用していたと考えられます。従って、遺跡から発掘された木材が、伐採されてからどのくらいの時間が経過して、そこに埋められたのかを考えると、伐採年から相当な時間を考える必要があるのですが、それを特定するのは大変困難です。従って木片の年輪から年代を特定するのは現在ではまだ実用的でないのです。

1 例をあげます。次に掲げた表は奈良県纏向遺跡の勝山古墳の周濠から発掘された木片のうち、年輪年代法が適用できる 5 片についてのデータですが、この中で一番新しく伐採されたと考えられるのは資料 1 で、伐採年は 198+1 AD です。また、もっとも古く伐採されたのは資料 5 で、伐採年は 103AD とされています。そのほかの資料も 130A. D. 付近に伐採されたと思われるものです。

(表 9) 勝山古墳周濠木片の年輪年代

資料 NO	部材名	樹種	年輪数	伐採年代
1	板材	ヒノキ	109+1	198+1A. D.
2	柱材	ヒノキ	115	131A. D.
3	柱材	ヒノキ	191	129A. D.
4	板材	ヒノキ	120	129A. D.
5	断片	ヒノキ	176	103A. D.

(橿原考古学研究所記者発表資料 2001 より著者が作成)

これら 5 片の資料は小さな木片で投棄されたものと考えられます。同じ場所から発見されましたから、投棄されたのは同時と考えられますが、伐採された年は最も古いものと最も新しいものとは 95 年の開きがあるのです。つまり、最も新しい木片 (資料 1) が伐採されてすぐに投棄されたと仮定しても、最も古い木片 (資料 5) は 95 年間どこかで使われていたものと考えなくてはなりません。つまりこの例だけをとっても、弥生時代には木は伐採されてから投棄されるまで、100 年近く利用されることがあることが分かります。その他の資料も、30 年程度どこかで他の用途に使われてい

たものと思われます。そう考えると、最も新しい資料 1 も伐採されてすぐに投棄されたものではない可能性を考える方が素直ではないかと思われます。資料 1 がもし伐採されてから 100 年経って投棄されたとしたら、資料 5 は伐採されてから 200 年経っていたはずです。このように年輪年代法は、遺物としての木の伐採された年の特定はできますが、土中に埋められた、あるいは投棄された年の特定は、必ずしも正確に特定できるわけではないことがお分かりいただけると思います。従って、このように年輪年代特定法もまだ切り札としては使えないのが現状です。

もう一つ、鷺崎弘朋氏によれば年輪の標準パターンを作成する時、飛鳥時代の AD640 頃で年輪パターンの接続に失敗し、弥生時代中、後期～古墳時代、飛鳥時代のパターンは 100 年古く年代が出るように狂っているのだそうです。それでは弥生時代中期以降、飛鳥時代までの年代の特定には使えないわけです。(鷺崎 2010)

しかし、これも C14 と同じく、これから多数の木材資料を検討することにより、伐採から投棄、埋没までの期間を合理的に割り出す方法が生み出されると思います。また、パターンが 100 年狂っている問題もいずれ修正されるでしょう。そのことで、既に発見されている膨大な遺物の絶対年代が特定できるようになれば、従来とは違う知見が得られるでしょう。

「DNA による年代特定」

さらに最近、古代の人の移動の実年代を割り出す方法として DNA の研究の成果を活用できることになりました。現在世界中に生きている人々はそれぞれ固有の DNA を持っています。DNA の中には父親から息子へ、つまり父系だけで引き継がれていく Y 染色体と、母親から娘へと母系で引き継がれていく、ミトコンドリア DNA という染色体があります。それぞれ Y 染色体は父系のルーツを探るのに適していますし、ミトコンドリア DNA は母系のルーツを探るのに適しています。そしてこの Y 染色体とミトコンドリア DNA を世界各地の人々で調べてみると、それぞれがいくつかの系統に分かれることが判明したのです。各系統は DNA の突然変異により誕生したものと考えられま

すので、それぞれの系統の DNA 配列を比較することにより、系統間の前後関係、すなわち突然変異の元となった系統と、突然変異により新しく誕生した系統が推定できるようになりました。また、世界の国、あるいは地域によってそれぞれの系統に属する人口の分布に偏りがあることも分かりました。このことから、世界各地域による系統別の人口の偏りによって、それぞれの系統がいつごろ、どこで誕生し、その後どういう経路をたどって現在のように拡散したかがほぼ推定できるようになったのです。

日本列島では Y 染色体の系統では D 系統と呼ばれる系統の人口が最も多く、その次に多いのは^{オー}0 系統と呼ばれる系統の人口です。D 系統は 1 万 3000 年前にアフリカで誕生し、その後、西アジア、東南アジア、中国北部に達し、そこから一部が朝鮮半島経由で日本列島に渡ってきたと考えられています。0 系統は 1 万 7000 年前に東南アジアで誕生し、その中の 02b グループは 2800 年前頃に日本列島に渡ってきたと考えられています。そこで、D 系統の人が先に日本列島に渡ってきた縄文人の中核をなす人々で、02b グループの人が弥生人だったのではないかと考えられています。その他の 0 系統の別グループの人はその後に来た人の子孫だと考えられるようです。(崎谷 2008) このように 02b グループを弥生人だとすれば弥生人の渡来の開始時期は紀元前 800 年ごろということになります。

一方、母系のルーツを探ることに適しているミトコンドリア DNA の中では、日本列島に多いのは D4 系統と、B4 系統、M7 系統です。これらの系統は一番新しい B4 系統でさえ、最低 1 万 5000 年以上前に成立した系統だと考えられ(篠田 2007)、縄文人のルーツを考えるには参考になりますが、弥生人のルーツを考える資料には今のところ使えないようです。つまり、DNA の研究から弥生人の渡来の時期をこれ以上細かく特定するのは現在では無理なようです。

「土器編年による年代特定」

このように C14 や年輪による年代特定はまだ信頼性が薄く、DNA 研究も現在の所、年代特定の切り札になりません。それでは弥生時代の実年代を従来から発表されてい

る土器編年から割り出すことはできないでしょうか。土器編年を実年代で示している研究者は多くはありません。さらに、歴博グループがC14を用いて、弥生時代の開始を紀元前10世紀に遡ると発表してからは、土器の編年と実年代について、各研究者は見解発表にさらに慎重になっているように見えます。もともと、どの型式の土器が実年代のどの時期のものとするかについて研究者間に見解の相違がありました。また、どの型式の土器を縄文時代、弥生時代、古墳時代のどの時代に属すると考えるかについても研究者間に意見の相違があったのです。さらに言えば、弥生時代の定義さえ見解が一致しているとは言い難いのです。先に述べたように、かつては縄文土器とされてきた夜臼式土器は、水田と一緒に発掘されたため弥生式土器の仲間に入れられ、縄文晩期といわれた時期をも弥生早期と呼ぶ研究者が多くなっているということもあります。

そこで、そういった研究者間に見解の差を整理し、土器の編年についておよその実年代を定めることができないか考えてみました。土器編年と実年代を発表している研究者は少なく、複数の研究者が土器編年と実年代について発表しているのは近畿出土の土器についての研究しかないようです。そこで発表されている土器編年と実年代を比較しおおよその見当が付けられないか検討してみました。すると、実年代に幅を認めればある程度整理が可能だということが分かりました。つまり、研究者によってどの土器をどの実年代のものとするかということには若干の差はありますが、その差はある幅の中に納まっているように見えますので、その程度の誤差を認めればおおよその実年代は決められるということです。しかし、弥生時代の遺跡遺物の実年代は近畿の遺跡だけではなく、むしろ北九州の遺跡と出土物に重要なものが多いので、九州の土器編年と実年代が必要になります。そこで、近畿の実年代をある幅の中ではありますが定めて、それに基づいて九州の弥生時代の絶対年代を推し量ることにしました。九州の土器編年と実年代については柳田靖男氏の見解が発表されていますのでそれを参考に近畿の編年とのすり合わせをしました。

次に示したのは4人の考古学者、森岡秀人氏、都出比呂志氏、寺沢薫氏、柳田靖男

氏の近畿地方の土器編年です。

(表 10) 考古学者による弥生土器編年と絶対年代比較

		森岡	都出	寺沢	柳田
弥生前期	年代	～BC190 頃	～BC220 頃	～BC190 頃	～BC220 頃
	土器	I	I	I	I
弥生中期	年代	～AD50 頃	AD0 頃	～AD50 頃	～AD0 頃
	土器	II III IV	II III IV	II III IV	II III IV
弥生後期	年代	～AD280 頃	～AD250 頃	～AD200 頃 (AD280 頃)	～AD200 頃 (AD300 頃)
	土器	V・庄内	V・庄内	V・VI (庄内)	V (庄内)
古墳時代	年代	AD280 頃～	AD250 頃～	AD200 頃～ (AD280 頃～)	AD200 頃～ (AD300 頃～)
	土器	布留	布留	(庄内)・布留	(庄内)・布留

(邪馬台国の会「第 294 回活動記録」、大塚初重「吉野ヶ里遺跡は語る」1992、寺沢薫「王権誕生」2008 から著者が作成) * () は庄内式を弥生時代と考えたときの編年

ごらんのとおり 4 人の考古学者の編年は微妙に違うように見えます。しかし、よく見ると各氏の編年は大きな差ではないことが分かります。まず弥生前期の終わりを 4 氏は BC190 年頃から、BC220 頃としています。その差は約 30 年ほどです。中期の終わりも紀元前後と紀元 50 年頃としています。その差は 50 年です。後期の終わりは各氏の意見が分かれるところです。AD200 年から AD280 年の差で、その差 80 年です。邪馬台国もこの時代にあったのですからここの編年は大切です。しかし、ここも実は大きな見解の差がないことが分かります。実は庄内式土器を弥生時代とするか古墳時代とするかの見解が 4 氏の間で分かれています。寺沢氏と柳田氏は庄内式土器を古墳時代の土器だとしています。また森岡氏と都出氏は庄内式土器は弥生時代の土器だと考えています。このことによって弥生後期の終わりが変わってくるというだけです。もし庄内式を弥生時代の土器だとすれば寺沢氏も柳田氏も弥生後期の終わりは

AD250年、AD280年頃と考えていることになります。寺沢氏と柳田氏は古墳時代の時代区分の指標を前方後円墳の出現と考えており、その時代の土器はまだ庄内式だったため庄内式を古墳時代の土器とみなしているということです。要するに事実は庄内式土器という弥生式土器の系譜をひく土器が使われている時期に前方後円墳が造られ始めたのだということにほかなりません。その時期を弥生時代だとするか古墳時代だとするかという研究者の視点の違いだけの問題です。そうすると弥生後期の終わりについても見解の差は30年程度ということになります。

著者は時代の変わり目については次のように考えるべきだと思います。つまり、弥生時代の前期、中期、後期の始まり、終わりはある日突然にやってくるものではないということです。弥生式土器の形式の差によって前期、中期、後期は区切られるのですが、例えば弥生時代の終わりといってもAD280年を以って突然弥生式土器が近畿地区から無くなったわけではないと思います。庄内式の土器が布留式^{ふる}の土器に変わりますが、それは徐々に庄内式の土器を使っていた人々が布留式の土器を使うようになったということで、その後もしばらくは庄内式土器と布留式土器の併存期があるはずだと思います。考えられるのはある集落では早く布留式土器を使いだしたが、ある集落では庄内式土器を使い続けていたというような具合です。従って、先ほどの4氏の見解をまとめた表でも、各氏の見解の差は並存期と考えれば、実際の始まり、終わりの時期の差はもっと小さいと考えるべきでしょう。そのように弥生各時期の移行時期に幅を持たせて考えれば4氏の見解を整理して弥生時代のおよその絶対年代をきめることができると思います。

つまり、4氏の土器編年から近畿の年代を割り出すなら、弥生前期の終わりはBC190年からBC220年頃、中期の終わりはAD0年からAD50年頃、後期の終わりは、庄内式土器を弥生時代の土器だとすれば、AD250年からAD280年頃とすればよいと言えます。また前期の始まりは寺沢氏と柳田氏の見解を取って紀元前290頃としてよいと考えます。それを整理すると次の通りになります。

弥生前期	紀元前 290 年頃～紀元前 220 年/190 年頃
弥生中期	紀元前 220 年/190 年頃～紀元 0 年/50 年頃（約 200～250 年間）
弥生後期	紀元 0 年/50 年頃～紀元 250 年/280 年頃（約 200～300 年間）

近畿地方の弥生時代区分は上記のように考えられますが、北九州はどうでしょうか。北九州の弥生土器編年は先の柳田氏が示しています。

(表 11) 柳田氏による弥生土器編年と実年代

		九州	近畿
弥生前期	年代	BC380～BC200	BC290～BC180 頃
	土器	夜臼 板付 I 板付 II	I
弥生中期	年代	～AD0	～AD100 頃
	土器	城の越 須玖	II III IV
弥生後期	年代	～AD200 (AD300～)	～AD200 頃 (AD300 頃)
	土器	高三瀧 下大隈 西新	V (庄内)
古墳前期	年代	AD200～ (AD300～)	AD200 頃～ (AD300 頃～)
	土器	(西新) 土師	庄内・布留

「吉野ヶ里遺跡と邪馬台国の行方」(学生社 1992) 所収の編年表より著者が作成

これを見ると柳田氏は九州の方が近畿より 100 年早く弥生時代が始まったが、前期が終わったのは近畿と同じころ、中期も近畿と同じころ始まったが、終わりは九州が 100 年早かったと考えているようです。しかし、後期の終わりは近畿地方では庄内式を古墳時代に入れたように、九州では西新式を古墳時代に入れています。もし、西新式を弥生後期とすれば、弥生時代の終わりは紀元 300 年頃になります。

なお、近畿では考えなかった弥生早期についてはどう考えるべきでしょうか。歴博の弥生時代紀元前 10 世紀説は、にわかには賛同しかねますが、Y 染色体 O2b 系統の日本列島への移動時期が紀元前 800 年頃とされることに注目して、その時期から弥生

人の渡来は始まったと考えることとします。それから弥生前期が始まる紀元前 350 年ころまでを弥生早期と呼ぶことはできると思います。以上から、九州編年をおおよそ次のように考えておくことで、大きな間違いはないと考えます。

弥生早期 紀元前 800 年頃～紀元前 350/300 年頃

弥生前期 紀元前 350/300 年頃～紀元前 220 年/190 年頃

弥生中期 紀元前 220 年/190 年頃～紀元 0 年/50 年頃

弥生後期 紀元 0 年/50 年頃～紀元 300 年頃

難民がつくった国「邪馬台国」その 4 —弥生時代の始まり—

「主要な遺跡にみる弥生時代の始まり」

では、弥生時代が始まってから日本列島で何が起きていたのかを考古学の成果から見てみましょう。ここでは弥生時代の早期と前期に九州の主要な遺跡で何が起き、その後、各遺跡がどう変貌していくかを見ていくことにします。

「弥生早期」 紀元前 800 世紀初頃～紀元前 350/300 年頃 —弥生の村の誕生—

弥生早期は中国では春秋時代にあたり各地で戦乱が起きました。それらの戦乱を逃れて日本列島に渡来してきた弥生人たちは、果たして安住の地を日本列島に見出したのでしょうか。彼らはまず北九州の沿岸にいくつかのムラを築いたようです。そして、そこで細々と水稻耕作をしながら定住していったと思われます。そのような弥生早期から栄えたムラの遺跡が北九州などで発見されています。その代表が佐賀県唐津市の菜畑遺跡と福岡県博多区の板付遺跡、福岡県糸島市の曲り田遺跡です。

「早期の菜畑遺跡」

菜畑遺跡は現在日本で発見されている最も古い水稻耕作遺跡で、紀元前 600 年～500 年ころのものと推定されています(弥生早期をもっと古く考える研究者もいます)。この遺跡からは一区画 10～20 m²の水田跡が複数発見されました。一緒に発掘された土器の形式が山ノ寺式土器という縄文晩期の土器だったので、この水田が日本で最も古い水田跡だとされたのです。(その後、これらの水田は夜臼式土器の時代まで下るとされましたが、山ノ寺式期の水田の存在は予想されています(春成 1990)) 水田は一边が 4～7m 程度の小型のもので、いわゆる畔^{あぜ}に囲まれ規則的に並んでおり、その中央を幅 1.5～2m の水路が通っています。調査区域の範囲では全部で 300 m²ほどが見つかりましたが、調査区域以外も含めると 1000 m²程と推定されています。同時に農耕の道具として、石包丁という稲の穂を刈る道具、磨製石斧^{せきふ}というきれいに磨かれた石斧、磨製石鍬^{せきぞく}という磨かれた石でできた鍬^{やじり}などが発見されました。特に石包丁や磨製石斧は朝鮮半島南部の無紋土器文化の磨製石器とよく似ているのです。(寺沢 2008)

(図版 5) 石包丁

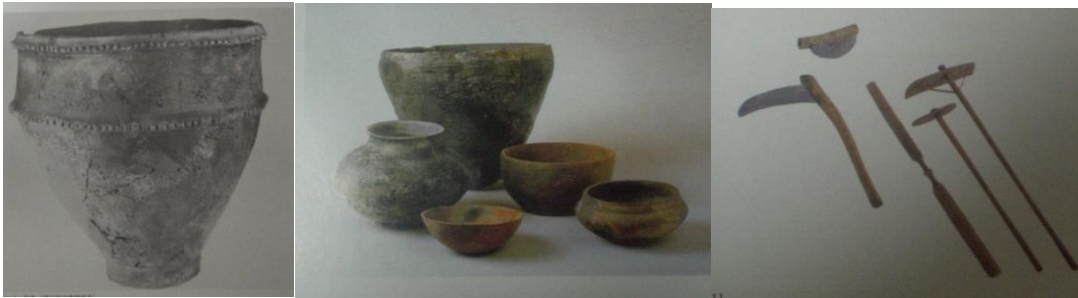


(菜畑遺跡)

菜畑遺跡からは、やや時代が下がった紀元前 400 年ころの水田跡も発掘されています。同時に発見された土器は夜臼式、山ノ寺式といわれ、縄文終末期とされていたも

のです。さらに弥生時代初期の土器といわれる板付Ⅰ式といわれる土器も発掘されているので、菜畑遺跡は縄文終末期から弥生初期まで続いていたとも言えるのですが、水稲耕作が始まった時代は弥生時代だと定義すると弥生早期には縄文土器がまだつかわれていたのだともいえます。どちらにしても弥生時代の定義の問題です。事実は水稲耕作が日本列島で始まった時代にはまだ縄文土器が使われていたということです。この弥生早期の水田からは、木製の鋤をはじめとした農耕具が発掘され、農耕技術はほとんど完成のレベルに進歩していたとみられます。

(図版 6) 夜臼式土器 (図版 7) 山ノ寺式土器 (図版 8) 木製農具



(菜畑遺跡)

菜畑遺跡は縄文土器と弥生土器の両方を持つ遺跡で、もともと縄文人が暮らしていたところへ弥生人が稲作技術を携えて渡来し、共に生活を営み、その後徐々に稲作のウエイトが大きくなっていったあとが辿れます。このことは弥生人が渡来した初期段階では在来の縄文人と共存していたと思わせるものです。菜畑遺跡からは縄文系の装身具と弥生系の装身具とが共に発掘されていることも、そういった縄文系の人と弥生系の渡来人とが共に生活をしていたことを思わせます。しかし、この併存が平和的な共存だったのか、それとも、弥生人が縄文人を強制的に拉致してきて奴隷のように使役していたのかはわかりません。あるいは縄文人の女性を妻にしてともに居住していた可能性も否定できません。ただその後に発見された耳原遺跡（大阪府）や大福遺跡（奈良県）などで縄文系の壺棺墓地に弥生式の壺棺が埋葬されている例が見つかって

いることから寺沢薫氏は初期の弥生遺跡では弥生人と縄文人が平和的に共存していたのではないかとしています（寺沢 2008）

注目すべきは、この遺跡から豚のあごの骨が三体分、棒に通された状態で発掘されたことです。このことは、菜畑の村に住んでいた人々は、豚を飼育する習慣を持っていた人々であったということを意味しています。縄文時代に豚を飼育していたという資料はないようですから、菜畑遺跡の人々は稲作と一緒に豚もつれて渡来した可能性が高いということでしょうか。

（図版 9）棒に通された豚のあごの骨



（菜畑遺跡）

「早期の板付遺跡」

板付遺跡は菜畑遺跡と並ぶ弥生早期（紀元前 600～400 年頃）にさかのぼる水稻耕作遺跡です。菜畑と同じような水田と、それに付随する水路や堰などの灌漑設備が発見されています。しかも、この点も菜畑遺跡と同じなのですが、これらの水田や灌漑設備は、日本列島における最も早い時期の水稻耕作の遺跡であるにもかかわらず、すでにあるレベルまで完成された技術のパッケージとして発掘されました。水路は幅 2 m、深さ 1m で人工的に掘削されたものでした。水路には堰が設けられ、取水口と排水口がありました。畔は土で盛り上げられたもので、ところどころ杭や矢板で補強さ

れていました。このことは板付遺跡に住んだ人々も朝鮮半島から水稲耕作技術を持ち込んだ人だったということを物語っています。

当時の住居跡も北の台地に発見され、同時に家畜の飼育場と思われる円形の溝を伴った遺構も発見されています。菜畑遺跡のように豚を飼っていたのでしょうか。

また、板付遺跡から弥生時代前期の土器が発見されました。板付式土器と呼ばれ、弥生早期の標準土器とされています。

(図版 10) 板付式土器



(板付遺跡)

同時に夜臼式土器と呼ばれる縄文時代末期の土器とされる土器も発見されています。これは縄文人と弥生人が同じ板付の村で併存していた証拠でしょうが、その併存が平和的な共存だったのでしょうか。

「早期の糸島の遺跡」

福岡県糸島地方の弥生早期の稲作遺跡は曲り田遺跡と大坪遺跡です。曲り田遺跡からは炭化米が発掘されており、大坪遺跡からは水田跡が発掘されました。共に紀元前5世紀以前に遡るものとされ、菜畑遺跡、板付遺跡と並ぶ最古の稲作遺跡です。

糸島地方の早期の弥生遺跡に^{しせきぼ}支石墓と呼ばれるものがあります。支石墓は中国東北

部と朝鮮半島からも発見されている墓地遺跡です。大きな石を数本の柱となる石で支えたような形をしているのでこの名がつけました。ただ、中国東北部と朝鮮半島北部にある支石墓は柱となる石の高さが高くテーブル状のものが多いのにならべ、朝鮮半島西南西部や日本列島で発見されているものは、柱となる石が低く碁盤状の形をしているのが特徴です。日本では北九州の西部に集中的に発見され、また短期間でこの墓制は終焉してしまっています。また、支石墓は西北九州に分布しますが、それより東には見られません。朝鮮半島でも西南部に集中する墓制であることから、朝鮮半島からの渡来人がもたらした墓制と考えられます。寺沢氏は北九州に渡来した初期の渡来人のルートを、支石墓を持たない集団の東ルートと支石墓を持つ集団の西ルートの2ルートあったのではないかとしています。(寺沢 2008)

糸島ではこの支石墓から豊富な副葬品が出土しています。中でも柳葉形磨製石鏃という石の鏃はこの地域に特徴的なもので、朝鮮半島からの影響を示すものです。やはり糸島でも初期の弥生人は朝鮮半島からの渡来人であったと考えられます。

「初期の弥生集落は渡来人のもの」

この三つの遺跡でお分かりのように、初期の弥生集落は、北九州の海岸付近で小規模の集団が小規模の水田を営んでいたと思われまます。しかし、その段階ですでに水田とそれを支える農耕具、灌漑設備などの水稲耕作技術は、つい最近まで使われていたものと変わらないくらい完成されたものでした。このことは渡来人がその故郷ですでに水稲耕作技術を習得していたことを示唆しています。また、初期の弥生集落が北九州から始まったと思われることは、その集落を営んだ人々が朝鮮半島から渡来した人々だったということを強く示していると言えます。糸島の支石墓などもそのことを支持しています。

弥生時代の早期には渡来人の数がまだ少なかったせいでしょうか、もともとその周辺に住んでいたと思われる縄文人と、同じ村で共同生活をしていた形跡が見られます。菜畑遺跡や板付遺跡で弥生式土器と一緒に縄文式土器が発見されるのは、そう

いった状態を示しているものと思われます。平和的な共存だったのか、あるいは縄文人を拉致してきて奴隷のように使役していたのか、または渡来した弥生人が縄文人の女性を奪ってきて妻にしたため、その妻たちが縄文式土器をつくったのか可能性はいろいろ考えられます。平和的であったか、敵対的であったかはにわかに言えませんが、弥生人と縄文人は北九州で一時期併存していたのは間違いありません。

「弥生前期」 紀元前 350/300 年頃～紀元前 220 年/190 年頃—ムラからクニへの発展と戦乱勃発—

しかし、弥生時代も前期になると様相が変わってきます。菜畑遺跡や板付遺跡のような弥生集落は周辺へ大きく発展し、村の領域は拡大し、水田の規模も大きくなっていきます。これは間違いなく弥生集落の人口が増加したことによるものと思われます。これは先に説明しました通り、朝鮮半島や中国大陸の戦乱を避けて日本列島に避難してくる人々が増加したためと考えられます。

弥生時代前期には、中国では戦国時代（紀元前 5 世紀末～紀元前 221 年）に入っており、中国東部では燕や齊といった国が覇権を争っていました。また、朝鮮半島では滅、貊といった国も勢力を伸ばし、互いに争っていました。そして 180 年ほど続いた戦国時代も秦の始皇帝が中国を統一（紀元前 221 年）して終わります。その時、燕も秦に滅ぼされてしまいます。しかし、秦も始皇帝が死ぬとたちまち混乱に陥り、紀元前 202 年、劉邦が前漢を建てるまで戦乱が続きます。この間、紀元前 194 年に朝鮮半島では衛氏朝鮮の建国にかかわる戦乱が起きます。このような中国と朝鮮半島の度重なる戦乱によりこの時期に朝鮮半島からの渡来が増加したと考えられます。

「前期の菜畑遺跡」

弥生時代前期になると、菜畑遺跡では水田が水路に矢板や杭を用いた大規模なものになり、農耕具も木製の杵、石製の鎌などが発掘されています。水田一枚の面積も初期のもの 2 倍ほどになっています。菜畑遺跡は、弥生の前期に栄え、その後は廃絶してしまったようです。しかし、その後も周辺に弥生のクニが存在したことは、近く

の宇木汲田遺跡（弥生時代中期）などから出土した銅鏡、銅矛、銅剣などによっても分かります。

「前期の板付遺跡」

板付遺跡では弥生時代前期になると中央の大地に環壕集落が出現します。環壕とは集落の周囲にめぐらされた、防御のための水のない堀のことです。環壕が作られたということは他のクニグニとの間に戦乱が起きたということです。しかもその戦乱は継続していたと考えられます。環壕は2重になっており、内側の環壕は長径が110m、短径が81mの卵形で、幅4m、深さ2mの規模を持っています。またその外側に夜臼式期の古い環壕があり、長径370m、短径170mもの広さを持っています。小さい環壕の中を内区、大きい環壕の中を外区と読んでいますが、内区はさらに壕で二つのブロックに仕切られ、一方のブロックには住居があったとみられ、もう一方のブロックには食糧の貯蔵穴とみられる穴がたくさん発見されました。このように環壕を2重にめぐらしているのは、同じムラの構成員の間にも身分の差ができていたことの証拠だとする研究者もいます。しかも、環壕は最初に外側の堀が掘られ、後になって内側の堀が掘られていますので、身分差は村の当初からあったのではなく村の発展と同時にできたのだとされています。（寺沢 2008）当然、環壕は外敵の侵入を阻止するのが目的で造られたものです。とすれば、2重の環壕のうち外側の環壕は外敵を阻止するもので、内側の環壕は、ムラの中心に住んだ者が、その外側に住んでいる同じムラの者の侵入を阻止しようとしたものだと考えられるというわけです。しかし、板付遺跡の外堀は水が流れていたとされ、水田耕作のための水路でもあったらしいので、ムラが造られた当初は用水があっただけで、後の時代に外敵を意識しなければならなくなつて、内堀を掘ったとも考えられます。2重の堀が身分差の表れというより、外敵から身を守らなければならない事態が後の時代に発生したと考えた方が素直のようにも思えます。2重の堀が身分差の表れとするなら後に3重4重に濠をめぐらす環濠集落も出てくるのをどう説明するのでしょうか。うがちすぎのように思えます。

この時代になると板付の水田は大規模なものになり、水路の幅は10m深さ2メートル以上になります。また、灌漑設備も強固になります。鋤、鍬、エブリ（田植え前に水田の表面を平らにならす道具）などの木製の農耕具も発見されています。石包丁で稲穂を刈り、臼と杵でもみ殻を取り除いていました。

（図版 1 1）木製農耕具



（板付遺跡）

弥生時代の水田耕作技術は目を見張るものがあることは先に述べましたが、しかし、だからと言って、弥生時代の食糧が水稲ですべて賄われていたと考えると、それは間違いのようです。寺沢薫氏によると、弥生遺跡の中で出土した植物性食料を種類別に見ると、実はコメを出土した遺跡の割合は第2位で、トップは縄文時代から利用されてきたカシやシイなどのドングリの仲間を出土した遺跡なのです。さらにクリやクルミ、トチノミを含めるとさらに多くなるといいます。（寺沢 2008）ドングリは穴を掘ってたくわえられていたようでそのような穴が各地の遺跡から発見されます。つまり弥生人たちは米をたらふく食べていたわけではなくドングリやその他の穀物を含めて食糧としていたので、水稲農耕が始まったからと言って豊富な食糧に恵まれたと考えるのは間違いのようです。むしろ、水稲耕作を始めてもなおドングリを食べなければならないほど食糧はひっ迫していたものと考えられます。そのことが弥生前期のム

ラムラが周辺のムラムラと対立し環壕を掘ってまで食糧を守らなければならなくなった原因ではないかと思います。そして食糧のひっ迫に拍車をかけたのは朝鮮半島からの難民の増加だったのではないかと考えるわけです。

また、この時代には甕棺墓^{かめかん}や木棺墓などの墓がつくられました。中央台地の甕棺墓には銅剣や銅矛を副葬したものが見つかっており、首長の墓と考えられています。

この時代首長が現れたと考えられます。それはやはり周辺のムラムラとの戦闘のためでしょう。戦闘が頻発すればその中で武力に優れたものの評価は上がり、また戦闘に長け、勝利をもたらす戦略を立案できるものが、おのずと村のリーダーになっていったでしょう。これが首長になった人々だったでしょう。また、優れたリーダーのもとに戦闘に常に勝つ強いムラには周辺のムラもその庇護を期待し、やがて生き残るために強いムラに従属していくようになったと思います。こうして強いムラはより強力な戦力を備え、次々とその支配する村の数も増えます。首長の権力も大きくなり、戦闘のための組織も強化されていったものと考えられます。その組織は環壕の掘削や城柵の敷設などを首長の指導のもとに進めたでしょう。さらにサブリーダーもあらわれ、原始的な官僚制度が生まれ、食糧を共同で保管する倉庫なども作られることとなります。場合によっては、それらの倉庫や城柵を守るための専従の兵士も生まれてきた可能性もあります。そうすると、これはもうムラではなく、クニと呼ぶべき集落になったと考えられます。板付のムラは、その後、北九州1の強大なクニに発展し、弥生中期には列島内で最大の都市国家になったものと思われま

「前期の吉野ヶ里遺跡」

弥生前期に入ると、佐賀平野でも、吉野ヶ里遺跡など、その後、弥生時代を通じて北九州の中心となる新たなムラが出現します。吉野ヶ里は佐賀県神埼郡にあり、弥生時代前期から中期、さらに後期までの長い間にわたって続いた弥生の都市国家です。

弥生時代前期には吉野ヶ里丘陵一帯に分散的にムラが誕生し、やがて南側の一角に環壕を持つ集落が出現します。

(図版 1 2) 環壕の断面



(吉野ヶ里遺跡)

板付にもあった環壕は、明らかに他からの侵略に備えたもので、そのために人々が協力して環壕を掘ったものと思われます。ということはそれを指導したリーダーが出現したはずで、吉野ヶ里の集落が人々の単なる集合であるムラから、リーダーに率いられたクニへと発展した証と考えられます。

弥生時代前期になると、北九州の弥生のムラには朝鮮半島の戦乱を逃れ難民が押し掛けます。人口は急激に膨らみ、食糧その他の物資は不足したことでしょう。こういった状況を背景にして、弥生のムラムラの間にも争いが起きたと考えられます。そういった背景の中で、板付や吉野ヶ里などの強勢なムラには人口も集中し、首長の権力が増して支配体制も強固となり、クニへと発展したものと思われます。強固な支配体制の整った吉野ヶ里や板付は周囲の弥生のクニグニと衝突する状態となり、大きな環壕を作り防衛体制を固めたのでしょう。

環壕はそのルーツを朝鮮半島に求めることができます。慶尚南道の釜山の北の蔚山市から紀元前 4～5 世紀の環壕集落遺跡が発見されています。規模も板付遺跡とほぼ同じ規模だとされています。また、同時期の遺跡としては同じ、慶尚南道晋州市大坪里遺跡の二重環壕や忠清南道扶余の松菊里の環壕と木柵の跡などが発見されていま

す。北九州に環濠集落が築かれる少し前に、朝鮮半島南部では環濠集落が築かれていたということは、当時の朝鮮半島南部も戦乱の続く時代だったと考えていいでしょう。これら、朝鮮半島南部の環濠集落をつくった人々の子孫が戦乱を逃れ北九州に渡来してきたとき、やはり戦乱に備えて環濠集落を築いていったものと考えられます。

難民がつくった国「邪馬台国」その5 ークニの発展と戦乱の激化ー

「弥生中期」 紀元前 220 年/190 年頃～紀元 0 年/50 年頃 ー大量の渡来がもたらした弥生の戦乱ー

弥生中期という時代は、中国では紀元前 202 年に前漢が建国し、秦が滅亡、そののち前漢の隆盛という時代が到来します。朝鮮半島では中国東北地方から朝鮮半島北部までを支配し栄えていた燕国が始皇帝の秦によって滅亡し（紀元前 221 年）、後に衛氏朝鮮（紀元前 194 年～紀元前 108 年）という朝鮮半島最初の国の興亡の時代に当たります。この時代の朝鮮半島では、燕が秦によって滅ぼされた時（紀元前 221 年）と衛氏朝鮮が前漢により滅亡したとき（紀元前 108 年）に戦乱が起きています。衛氏朝鮮が滅びたとき、朝鮮半島には^{らくろう}楽浪、^{げんと}玄菟、^{りんどん}臨屯、^{しんぼん}真番の 4 郡が置かれます。中国では紀元前 1 世紀の末に^{おうもう}王莽が権力を握り、自ら皇帝を名乗り、前漢を滅ぼして新を建国します。しかし、国中これに服さず、紀元 18 年^{せきび}赤眉の乱が勃発、劉秀により新は滅びます。前漢末から新の建国、滅亡と続くこの時期に中国は大混乱に陥りました。前漢末に 6000 万人あった人口は半減したといわれています（岡田 1977）。

また、紀元前 37 年、朝鮮半島では高句麗が建国、前漢、新と争います。このようにこの時期は中国、朝鮮半島とも戦乱が激しくなり、大量の難民が発生、その一部は日本列島に渡来してきたと考えられます。しかも、その数はそれまでとは比較にならないものだったでしょう。

日本列島ではこの時期に弥生中期を迎えます。弥生時代中期は弥生時代の中でも画期的な時期です。前期とは全く違う遺跡、遺物が現れるのです。

そういった時代の代表がやはり北九州にあります。弥生前期に登場した佐賀県神埼郡の吉野ヶ里遺跡は大きく発展し、福岡市の須玖遺跡群、福岡県の平塚川添遺跡などが新たに登場し発展していきます。

「中期の吉野ヶ里遺跡」

弥生時代中期には吉野ヶ里丘陵の南側を一周する大きな環壕が掘られます。首長を埋葬した墳丘墓や、たくさんの甕棺墓（甕を二つ合わせたものを棺として人を埋葬した墓）が列をなす墓地も見られます。集落の発展とともに環壕が増え、その防御も厳重になってきていることから、この時期北九州の弥生のクニグニの間に戦闘が激しくなってきたものと推測されます。戦闘は繰り返され犠牲者も多く出ていたようです。首のない人骨が葬られていた甕棺や、鏃を多数打ち込まれていた人骨などはその戦闘の犠牲者でしょう。

（図版13）首のないまま葬られた人骨



（吉野ヶ里遺跡）

こういった戦争の犠牲者と思われる墓は前期の遺跡からも一部発掘されています。たとえば福岡県糸島市の弥生早期の新町遺跡、長野宮ノ前遺跡などから戦闘で負傷し戦士したと思われる人骨が出ていますが、その数はまだ少なく地域も玄界灘沿岸に限られています。しかし、弥生前期後半から中期になると、そういった戦争の犠牲者と思われる墓は佐賀平野、筑後平野に広がってきます。吉武高木遺跡、吉武大石遺跡、

西小田遺跡、横隈狐塚遺跡、藤崎遺跡、隈・西小田遺跡など戦争の犠牲者と思われる墓が見つかっています。同時に戦闘が熾烈化したのでしょうか遺体の損傷も激しくなったようにも見えます。

また、大型の墳丘墓も作られ、そこに埋葬される人が現れたことから、支配層が身分として定着してきたものと考えられます。

「須玖遺跡群の発展」

弥生時代中期、吉野ヶ里と同時代に、福岡平野の南西部にある春日丘陵の周辺に大規模な集落ができたようです。この集落は須玖遺跡群と呼ばれ、三笠川の支流に沿って営まれたようで、南北3 km、東西1 kmの範囲に水田跡、住居跡と同時に様々な製作に携わったたくさんの工房跡が発見されています。

(図版 14) 須玖遺跡群の範囲



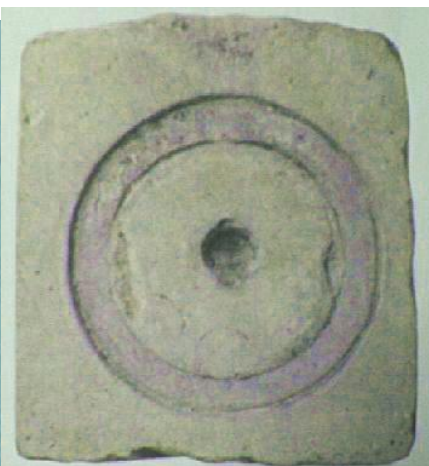
《白線で囲まれた地域》

遺跡の範囲は、現在住宅地になっているため全体の発掘はできず、部分的な発掘調査しかできていません。しかし、須玖遺跡群では青銅器工房跡から銅剣、銅戈、銅鐸などの鋳型や、銅を溶かした^{るっぽ}坩堝が出土しており、当時日本列島で最大の青銅器工房群があったのではないかと考えられます。

また、須玖遺跡群の一つ五反田遺跡からはガラス製の勾玉などを作った工房跡とみられる遺跡も発掘されています。

(図版 15) ガラス製勾玉の鋳型

(図版 16) 銅鏡の鋳型



(赤井出遺跡)

(奴国の丘)

(図版 17) 銅剣・銅戈の鋳型



(須玖岡本遺跡)

(図版 18) 小銅鐸の鋳型



(大谷遺跡・須玖岡本遺跡・岡本遺跡)

さらには須玖遺跡群の赤井出遺跡からは鉄器の未成品も発見されており、鉄器も生産していたと考えられます。

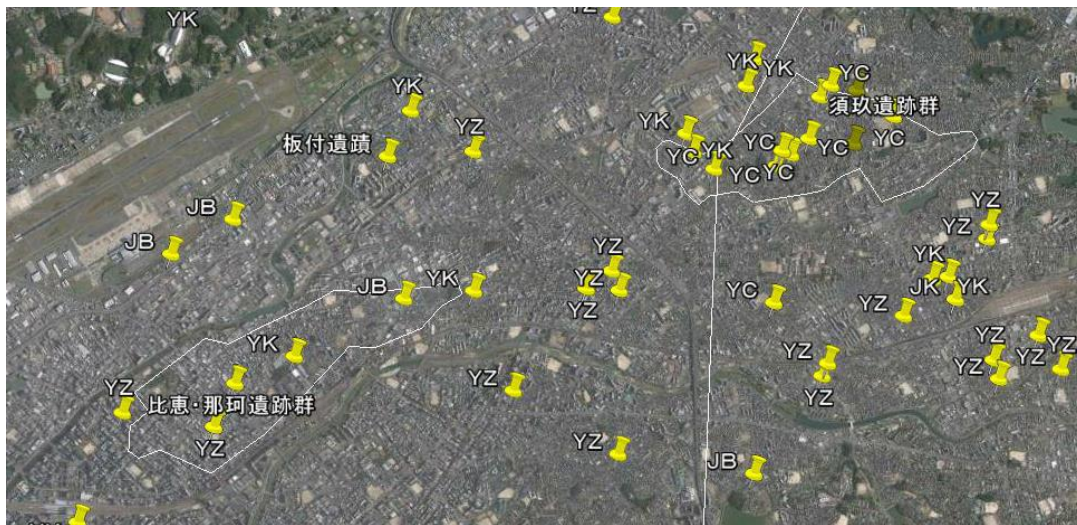
また、遺跡群の一つ、大南^{だいなん}、高辻遺跡からは多数の住居跡とV字型の溝を持つ環壕集落と思われる遺構が発見されており、ここに弥生時代中期に大規模な環壕集落が存在したことがうかがわれます。残念ながら、春日丘陵は早くから開けた住宅地で、現在ほとんどの地域に住居が建っており発掘はままならないため、その全容が明らかになっていないのは惜しいことです。

しかし、この遺跡が存在する春日丘陵は、板付遺跡と同じ三笠川水系の少し上流に位置し、距離も直線距離で3 kmほどと近いことから、板付遺跡と無関係に存在した遺跡とは考えにくいのです。むしろ、弥生時代早期に開けた板付遺跡がその後発展して、弥生時代中期以降、三笠川の流域の春日丘陵上に大きな環壕集落をいくつも抱えた大規模なクニが誕生していた可能性が高いと考えられます。しかも、そのクニは当時のハイテク技術者を集め、あらゆる青銅器の生産やガラス製の玉の生産を行い、他の弥生諸国に供給していたのではないかと考えます。

須玖遺跡群の広さは300ha（ヘクタール）という当時の都市規模としては破格の大きさだったと考えられます。小田富士夫氏編の「倭人伝の国々」（小田2000）によれば邪馬台国近畿説の最有力候補地である纏向遺跡は100ha強しかありません。さらに、須玖遺跡群の北には比恵^{ひえ}・那珂^{なか}遺跡群という、これも300haほどの遺跡が存在してい

ます。現在は福岡市の中心部であり発掘はできませんし、昭和初めの開発で遺跡は壊されたとも言われています。惜しいことですが、この二つの遺跡だけを考えても当時の倭国の中心地は北九州にあったとせざるを得ません。なぜならこの二つの遺跡は合わせると纏向遺跡の6倍の大きさがあるのです。これほどの大規模な遺跡は他の地域では発見されていません。

(図版 19) 須玖遺跡群と比恵、那珂遺跡群の範囲



(白線で囲まれた地域)

「平塚川添遺跡」

次に注目したいのは平塚川添遺跡です。この遺跡は筑後平野にあり、筑後川の支流、こいしばる小石原川の流域にあります。登場した時代は弥生時代中期と考えられています。発掘されたのは約17haほどの範囲ですが、幾重にも重なった環壕に囲まれ、竪穴式住居跡が300か所ほど、掘立柱建築が100か所ほど見つかっています。遺跡の中央部には2haほどの敷地の中に集落が集まっているところがあり、中央集落と呼ばれています。中央集落には住居跡のほか大型の掘立柱建築跡も発見されています。中央集落の外側にはまた幾重にも環壕で囲まれた小集落が7か所あります。この遺跡からは弥生式土器、耳飾りなどの装飾品、銅鏃、銅矛、銅鏡破片などの青銅器と木製の農具などが発

見されています。また銅矛の鑄型も発見されており、ここにも工房があったと考えられます。

発掘された範囲は17haほどで、規模は須玖遺跡などにはかなわないのですが、弥生中期ごろにできた集落であること、環壕が幾重にも取り巻いていて、常に戦争の危険に直面していたと思われること、銅矛の鑄型が発見されたことから青銅器工房があったと思われることなど、須玖遺跡、吉野ヶ里遺跡と共通する特徴を持っていることが注目されます。

「戦乱の激化と環壕の拡大」

弥生中期の遺跡には明らかに前期の遺跡とは異なる特徴があります。まずは遺跡の規模です。弥生の集落は弥生前期にムラからクニへと発展したとみられますが、その規模はまだ大きくありません。しかし、中期になると集落の規模は格段に大きくなり、また、環壕も規模が拡大し、遺跡によっては二重三重に壕をめぐらしているところもあります。これは渡来した人々の数が一気に増大し、食糧不足などにより、弥生のクニグニの間の戦乱がさらに激しくなったためと考えられます。次に弥生時代中期に列島で何が起きていたのか見に行くことにしましょう。

弥生時代年表（後期前半まで）

年代	中國・朝鮮	日本列島	青銅器、鉄器	遺跡
BC800	春秋時代始まる	弥生 早期		北九州に支石墓、甕棺墓
BC600				
BC500	呉越の抗争			
BC403	戦国時代始まる 朝鮮半島への難民多数	弥生 前期	小規模水稻耕作開始	菜畑、板付遺跡出現 小規模な水田
BC300	燕強勢			
BC221	秦中国を統一、燕滅亡			
BC206	秦滅亡			
BC202	前漢建国			
BC194	衛氏朝鮮興る	弥生 中期	弥生人渡来増加	細型青銅武器 青銅器生産 朝鮮式銅鐸 鉄器出現
BC154	五楚七国の乱			
BC108	衛氏朝鮮滅亡 朝鮮 4 郡を置く			
BC82	臨屯、真番郡廃止 洛東江流域混乱			
BC37	高句麗興る	弥生 後期	焼畑遺跡の高地性集落（第Ⅱ期） 難民渡来急増 防衛の高地性集落拡大（第Ⅲ期）	環濠集落関東まで拡大 首なし人骨 須玖遺跡テクノポリス
BC8	漢滅亡、新興る			
AD12	新高句麗を討つ			
AD18	赤眉の乱	弥生 後期	防衛的の高地性集落減少（第Ⅳ期） 防衛的の高地性集落近畿のみに（第Ⅴ期前半）	中広型青銅器 聞く銅鐸 広型青銅器 北九州で鉄器急増 須玖遺跡青銅器鋳型 見る銅鐸
AD23	新滅亡			
AD25	後漢興る			
AD37	高句麗楽浪郡を襲う			
AD57	委奴国王金印拝受			
AD107	倭王師升朝貢			須玖遺跡繁栄 吉野ヶ里繁栄 糸島王墓

参考文献

- 安本美典 「古代史論争最前線」 柏書房 2012
 安本美典 「邪馬台国ハンドブック」 講談社 1987
 崎谷満 「DNA でたどる日本人 10 万年の旅」 昭和堂 2008
 篠田謙一 「日本人になった祖先たち」 日本放送出版協会 2007
 宝来聡 「DNA 人類進化学」 岩波書店 1997
 松本秀雄 「日本人は何処から来たか」 日本放送出版協会 1992
 窪田蔵郎 「鉄の考古学」 雄山閣出版 1987

- 春成秀爾 「弥生時代の始まり」 東京大学出版会 1990
奥野正男 「邪馬台国の東遷」 毎日新聞社 1982
奥野正男 「考古学から見た邪馬台国」 毎日新聞社 1982
奥野正男 「邪馬台国紀行」 海鳥ブックス 15 1993
奥野正男 「邪馬台国はどこだ」 徳間文庫 1990
近藤喬一 「東アジアと青銅祭器」 『松本清朝編 銅剣・銅鐸・銅矛と出雲王国の時代』
日本放送出版会 1986
榎原考古学研究所 「勝山古墳出土木材および年輪年代測定結果」 2001
寺沢薫 「王権誕生」 講談社学術文庫 2008
鷺崎弘明 論文「年輪年代・炭素年代法と弥生・古墳時代の年代遡上論」2010～2011
古代史の海 6 1号～6 5号
鷺崎弘明 論文「歴博『古墳出現期の炭素 1 4年代測定』は誤り」2011

【自己紹介】 星野盛久

大分県在住の邪馬台国研究者です。4月に続き論文を応募します。長年勉強してきた成果を論文にまとめ一度自費出版しました。全邪馬連に入会し、こういった論文発表の機会があることを知り、論文をまとめなおしながら応募をしています